

「何のために勉強するのか」夢を持たせることから始まる

ナガセ社長

永瀬 昭幸



Interviewer 内野 雅一 (本誌編集長) Photo 根岸 基弘 (東京都武蔵野市のナガセ社長)

ナガセ あき幸
1974年、東京大学経済学部卒。野村証券入社。在学中に「ナガセ進学教室」を始め、76年に「ナガセ進学塾」を設立し、「ナガセ」を設立し、社長に就任。東進ハイスクール、四谷大塚、イトマン・スイミングスクールなどを全国展開する。61歳

7月、米セザミ・ワークシヨップ社(ニューヨーク)からテレビ番組「セザミ・ストリート」の英語学習プログラム販売権を取得しました。

永瀬 「セザミ・ストリート」でおなじみのエルモやゼックパードなどのキャラクターを使った映像とゲームなどを、楽しみなから英語を身に付けるコンテンツをつくり、販売できるというものです。3、12歳の幼児児童が対象で、2010年10月からこれを使った授業をスタートする予定です。1年度から公立小学校で英語の授業が必修になることをらみ、それをサポートしているように考えています。

幼児向けの取り組みは初めてです。

永瀬 昨年、イトマンスイミングスクールの子会社化しました。スイミングには幼児向けもあります。勉強という面では初めてで、これで中学までありました。しかも、少子化が進んで浪人パブルがはじけてと、経営に大きく影響してきました。そこで、思い切った現役向けの予備校に方向転換し、そのトップを目指すことにしたのです。

今後、どう成長しますか。

永瀬 2つのことを考えています。1つは、大学受験部の東進に、高3になってからでは、高2、高1もつと早い段階から通って実力をつけてもらうという多学年化。もう1つが、国際化。海外の難関大学を目指す現地の人のための予備校を開校すると、スイミングスクールを国際展開すると。世界中の教育に貢献することが私の夢です。

(構成) 南 敦子・編集部

受験生を対象の四谷大塚、校受験の東進スクール、現役高校生を中心とする大学受験の東進ハイスクール、全国に映像による授業を配信する東進衛星予備校と、幼児教育から大学受験までカバーできます。

衛星予備校には、
永瀬 かつては通居層を使い、フランチャイズ契約を結んでいる全国の塾に、授業映像を配信していたことからその名が残っていますが、いまは主にインターネットです。地元においても、映像が見られるメリットがあります。今3月現在、763校が契約を結んでいます。

スイミングスクールは異質な感じですが。
永瀬 子供を育てるには、知育・徳育・体育が必要だとずっと考えていました。リテラシーや社会の役に立つ人材は単なる知識だけ備わっていてもダメ。体育も欠かせないでしょうし、勇氣や正義感といった徳育も大事です。その体育と徳育をイトマンスイミングスクールで教えていきたいと考えたわけです。1971年から、現在20あるフランチャイズと協力関係を深めて、全国で新たに1000ほどのフランチャイズを募集している計画です。

世の中は多文化です。
永瀬 いまの子供たちを見ていると、4種類に分けられるように思

ます。自分なりに夢をもって一生懸命努力している人、夢はあるのだけれど何もやらない人、夢はないけどまじめに勉強している人、最後がそのどちらでもない人、つまり夢もなければ、大学に誰もが入れるという大学全入時代になり、夢を持ちにくいのかも知れません。何のために勉強するのか、と、ですからいまは子供たちに強みに対するモチベーション(動機付け)を持たせることから取り組まないとはいけません。

そこ私には、現役の大学1年生が後輩を指導する「担任助手」の制度を、5年ほどかけてつくってきました。後輩のために自ら志願してきた東進の卒業生である大学1年生たちが、大学受験に際して参加したこと、成功、失敗の経験などを活かして生徒の指導にあたります。

多学年化と
国際化
永瀬 私が始めたきっかけは、1978年、東大紛争が始まった年。鹿島出身なのですが、高校の先輩が医学部改革運動により東大を退学処分となりました。そこで先輩を教おうと処分撤回を求める運動に参加したら、高校の教師だった父から仕返りを止められてしまったのです。生

横 顔
Q 30代のころはどんなビジネスマンでしたか
A 野村証券を退社し、ナガセとして小中学生向けの塾を始めて数年がたったころです。

Q 最近買った物
A ゴルフが好きで、クラブなどをよく購入しています。最近、特に気に入っているのが、テーラーメイドの「R9」モデルです。自分で弾道を調節したりできるので、工夫をしているのが楽しんでいます。

Q 休日の過ごし方
A ゴルフをしていないければ、全国の衛星予備校のビジネスパートナーたちと会い、研修をしたりしています。

インタビューーひとこと
「大学全入」は、いろいろなところに影響を及ぼしているようだ。それなりにやっつけられれば大学に入れるのだから、勉強の動機付けが乏しくなっているのか。「死に物狂いにさせる」ことから、永瀬さんの仕事は始まるらしい。大学時代、生活費を出すために始めたものが事業として拡大。少子化のなか、幼児の英語教育や水泳まで手を広げ、成長に挑む。話し出した止まらない。積力的。死に物狂いなのは、この人のようだ。